會　務

第21卷第5號　昭和10年5月

役　員　會

第4回役員會（昭 10・4・22）

出席者　青山會長　草間，平井兩副會長　池邊，內田，佐藤，鈴木，野口，藤井，古川の各常議員，岡野，那波，名井の各前會長

決議並に報告事項

1. 土木學會振興委員會第2部會委員に平山復二郎君，井上隆根君，堀尾豐熊君，沼田政矩君，河西定雄君，三浦七郎君，椹木寬之君，宮本武之輔君，山下輝夫君，樫部　保君，高橋三郎君，金子源一郎君，德善義光君，田中　豐君，山口　昇君，內海清溫君，兒玉靜雄君，久保彌太郎君の18名を，第3部會委員に立花次郎君，船越春雄君，千秋邦夫君，小澤久太郎君，原田忠次君，伊藤　剛君，岡崎三吉君，南保賀君，太田尾廣治君，野坂孝忠君，鶴岡鶴吉君の11名を依囑せり。

2. 5月開催の視察旅行を霞ケ浦海軍航空隊並に水郷巡りとし5月5日(日曜日)之を催すことゝせり。

3. 日本工學會用語統一調査委員會第1次決定用語を一括報告せり。

4. 土木學會會員の生年月別表を作成報告せり。

5. 第3回工學會大會第1回準備委員會議事を古川，佐藤兩委員より報告せり。

6. 維新以前日本土木史編纂に依る援助を服部報公會へ申請することゝし手續き等は理事に一任せり。

7. 故來島良亮君記念碑建設發起人總代香坂昌康君より申出でに係る土木賞牌贈呈基金並に賞牌原型製作費寄附の件は之を受理することゝせり。

8. 6月講演會を開催することゝし講演者及演題の選定を理事に一任せり。

9. 入退會の件

伊東祐介君外17名を會員に，阿久根國吉君外47名を准員に，新井敬造君外23名を學生員に入會を承認し，明石六郎君外92名の准員を會員に，阿武茂君外121名の學生員を准員に轉格承認せり。

編輯委員會

第5回編輯委員會（昭 10・5・6）

出席者　藤井編輯長，岡田，龜田，永田，成瀨，野口，福田，星野，堀越の各委員

協議事項

1. 第21卷第4號所載論說報告に對する討議依頼先を決定す。

2. 會誌登載の論文に對する謝禮標準を內定す。

3. 第21卷第4號所載工事計畫寫眞，論說報告，彙報及參考資料の謝禮を決定す。

4. 第21卷第5號に下記論文を追加す。

討議：跳水現象の實驗的考察（准，工，本間　仁），同（著，會，今野彥貞），同（會，工，濱江　昇），同（著，會，今野彥貞）

彙報：全鈴接江戶坂跨線道路橋設計概要（會，工，稻葉權兵衛）

5. 第21卷第6號登載論文を下記の通り決定す。

講演：飛行機による寫眞測量に就て（理，篠　邦彥），地震動に就て（理博，石本巳四雄）

論說報告：小銃彈に依るセメント・モルタルの破壞狀況に就て（會，工博，福田武雄），擁壁の安定增大の二・三の方法に關する實驗的研究（會，工，松尾春雄），Strauss型直上對重式跳開橋に就て（會，工，安宅　勝），建設線に於けるスピード・カーブの應用に就て（會，工，大石重成，准，工，萩野璋太郎）

討議：鑄鐵管の流量に就て（會，工，岩崎富久），同（著，會，工，池田篤三郎），水道鐵管破裂の復舊作業と所要時間に就て（著者に照會中）（會，植村倉藏）

彙報：名倉發電所工事概要（會，工，鈴木鹿象），熊川電氣田迎發電所工事概要（工，山口圭助）

特許抄錄：セメント乳注入法外24編

參考資料：無限個の穴の列を有する板中の應力（最上），水硝子を使用するコンクリートの養生法（中谷），鋲結合の彈性々質に就て（奥田），水締土堰堤の現場試

驗法（岡崎），ピトー球による流量測定（中路），立體的に曲つた管中の流れ（伊藤），沈下しつゝある湖岸につくられた新型 Seawall（伊藤），曲線軌道に於ける鋼構造物の沓の置き方（小野），眼鉄を用ひたる鐵筋コンクリート・ゲルバー桁用鉸節構造の一例（富田），マイアミ河管理委員會管轄に關する水締土堰堤の收縮（玉置），土木工事其の他に於ける材料費，勞力費等の割合（伊藤），混合汚泥の消化率（竹内）

6. 寄稿に關する注意事項を審議し從來の規定を多少變更せり。

7. 會誌に於けるローマ字は今後日本式ローマ字を採用することに決定せり。

8. 土木賞牌に關する件

土木賞牌の贈呈方法，意匠等に就き役員會より編輯委員會に諮問ありたるに對し審議の結果，土木賞牌は 3 個とし，その年度内の優秀論文 3 編に對し贈呈する事，而して賞牌の意匠は會員より之を募集する事と議決しその旨報告する事とせり。

9. 工事年鑑に關する件を審議せり

10. 彙報に對する原稿を廣く聚集する爲編輯委員にて各關係工事箇所を調査し，各關係者に投稿方を依頼する事とす。

11. 臺灣震災地に對し土木學會より視察員を派遣する樣役員會に要求する事を申合せり。

用語調査會

第 40 回幹事會（昭 10・5・8）

出席者　中山委員長，中川幹事長，青木，樫部，河口，菊地，久保，高橋，田中，中原，中山，萩原，福田，藤井，本間，三浦，宮本，山口，五十嵐の各幹事，古川主事，柴原書記長，中川囑託

協議事項

(1) 工學會用語統一調査委員會決定コンクリート用語採否之件

種々協議の結果本會の調査せるものと相違せるもの僅少なるを以て工學會決定用語を採用することに決定す。

(2) 同委員會第 1 次決定用語に關する件

工學會には福田武雄，山田博愛の兩君が當會を代表して出席せるを以て本幹事會は右兩氏に委任し別に審議を行はざることゝす。

(3) 下記分科會決定案を審議し幹事會決定案を定む

河川之部，下水道之部，水理之部，軌道之部，材料及施工法之部，應用力學之部

(4) 土木一般に關する用語の件

藤井幹事に至急原案作製方を一任す。

(5) 應用力學用語と他部門用語との關係に就て

前回に於て應用力學用語は工學會決定用語を採用することに決定せるも之と密接なる關係を有する橋梁及構造物では不都合を生ずるもの相當あるを以て再び下記の幹事に於て審議することゝす。

青木楠男君	田中　豐君	中原壽一郎君
福田武雄君	藤井眞透君	三浦七郎君
宮本武之輔君	山口　昇君	

(6) 編纂方針に關する件

前回にて決定せる編纂方針を種々協議の結果下記の通り訂正す。

土木工學用語集の編纂方針

1. 表題を土木工學用語集とす。
2. 用語の配列は各部門別とす。
3. 各部門の配列順序は次の如くなす。

(1) 土木一般	(2) 應用力學	(3) 水理
(4) 測量	(5) 河川	(6) 砂防
(7) 水力電氣	(8) 上水道	(9) 下水道
(10) 港灣	(11) 道路	(12) 橋梁及構造物
(13) 軌道	(14) 鐵道	(15) 都市計畫
(16) 材料及施工法		(17) 土木機械

4. 各部門の略稱（符號）を次の如く決定し之を索引各語の末尾に附記すること（括弧内は略稱を示す）

應用力學（力）	水理（水）	測量（測）
河川（河）	砂防（砂）	水力電氣（電）
上水道（上）	下水道（下）	港灣（港）
道路（道）	橋梁及構造物（橋）	
軌道（軌）	鐵道（鐵）	都市計畫（都）
材料及施工法（材）		土木機械（機）

5. 索引は英，獨，佛各別に ABC 順とす。
6. 用語にして讀み方のまぎれ易きものは振假名（片假名）を附すること。但し假名は文部省國語審議會の案による。

7. 各部門に於ける用語はアイウエオ順に配列す。
8. 本の大きさは日本標準規格 A 列 6 號とす。

(7) 會務促進之件

選定用語 2178 語の內會誌に登載せる幹事會案は 2079 語その內今回決定せる用語は 6 部門 868 語，未だ會誌に登載せざるものは僅かに 99 語なるを以て會務を促進して近き將來に於て辭典を完成せんことを申合す。

土木學會振興委員會

第 3 部會第 1 回委員會（昭 10·4·24）

出席者 立花，千秋，船越，原田，野坂，太田尾，南保の各委員，青山會長，草間，平井の兩副會長，古川主事，柴原書記長，小野寺庶務，五十嵐編輯

振興委員會の設置並に部會委員依囑の趣旨に就き青山會長の說明あり次で委員の協議に移り二·三の事項を申合せ而して次回の會合を 5 月 13 日とすること等を決定せり。

第 2 部會第 1 回委員會（昭 10·4·26）

出席者 井上，內海，榧木，金子，兒玉，河西，田中，德善，平山，堀尾，三浦，宮本，山口の各委員，青山會長，草間副會長，古川主事，佐藤主計，藤井編輯長，柴原書記長，小野寺庶務，五十嵐編輯

振興委員會の設置並に部會委員依囑及目的等に就き青山會長の說明あり次で委員長互選の結果平山君を全會一致にて推し續て臺灣震災視察員派遣の件，旅順工科大學へ土木工學科設置の件其他の事項を決議し次回の會合を 5 月 14 日開催することに申合せり。

維新以前日本土木史編纂委員會

第 27 回委員會（昭 10·5·1）

出席者 眞田副委員長，名井，茂庭，安藝，牧，久野，赤木，小川，眞島，伴，江澤の各委員，渡邊囑託

本月の蒐集調査事項の報告を終り下記事項を決議せり。

決議事項

1. 維新以前日本土木史の名稱を明治以前日本土木史と改正し製本すること
2. 表紙の體裁は從前作製せる見本に學會のマークのみを附すること
3. 辻文學博士に依頼し文學士 1 名を依囑すること

日本工學會記事

昭和 10 年 3 月 29 日午後 4 時 30 分より日本工業倶樂部に於て日本工學會評議員會を開催し下記事項が決議せられ次で一般會務の報告ありたり。

1. 昭和 10 年 2 月末日本工學會貸借對照表中科目變更の件
2. 昭和 10 年日本工學會收支豫算中一部變更の件
3. 工政會に對する貸付金の處置に關する件
4. 第 3 回工學會大會開催に關する件
5. 社員總會に提出すべき事項に關する件

昭和 10 年 3 月 29 日午後 5 時より日本工業倶樂部に於て日本工學會社員總會を開催し下記事項が決議せられ次で一般會務の報告ありたり。

1. 工政會に對する貸付金の處置に關する件
2. 第 3 回工學會大會の開催に關する件

昭和 10 年 4 月 17 日午後 4 時 30 分より日本工業倶樂部に於て第 3 回工學會大會準備委員會を開催し下記事項が協議決定せられたり。

1. 本準備委員會の名稱は今後第 3 回工學會大會委員會と改む
2. 追加委員の選定は日本工學會理事會に一任すること
3. 大會委員長の人選は日本工學會理事會に一任すること
4. 大會の日程は明年 4 月 4 日以後とすること
5. 官邊其の他必要の向に大會顧問を委囑すること

講演會

第 66 回講演會（昭 10·4·16）

會場 帝國鐵道協會

來聽者 115 名

演題並に講演者

（イ） 飛行機に依る地形測量に就て

陸地測量部 理學士 篠 邦彦君

（ロ） 地震動に就て

東京帝國大學教授 理學博士 石本己四雄君

閉會後有志晩餐會を開く出席者 14 名

第 22 回視察旅行

視察場所： 霞ケ浦航空隊，鹿島神宮，横利根閘門，水郷大橋工事，香取神宮，伊能忠敬舊家

參加者： 52名外茨城，千葉兩縣土木課長其他參加

日時行程： 昭和 10 年 5 月 5 日午前 7 時 40 分上野驛發 9 時 16 分土浦驛着，自動車にて霞ケ浦航空隊に到り陸上班，水上班兩飛行場を見學し，10 時 30 分汽船にて霞ケ浦飛行場を發し潮來に上陸，自動車にて鹿島神宮を參拜し横利根閘門及水郷大橋工事を視察，汽船にて佐原に上陸，香取神宮參拜及伊能忠敬舊家を見學，午後 5 時 23 分佐原驛發 7 時 37 分兩國驛着解散せり。

その他の記事

○昭和 10 年 4 月 21 日臺灣震災に就き臺灣總督府交通局松本道路港灣課長外 6 君へ見舞電報を發せり。

○昭和 10 年 4 月 22 日午後 4 時 30 分より理事會を開催し青山會長外 5 君出席し役員會議案に就き協議せり。

○昭和 10 年 4 月 23 日春季視察旅行開催を東京府及隣縣在住全會員に通知せり。

○昭和 10 年 4 月 24 日土木學會誌第 21 卷第 4 號發行成規の手續を了し 4 月 25 日これを全會員に配布せり。

○昭和 10 年 5 月 1 日午後 5 時より理事會を開催し青山會長外 5 君出席し振興委員會第 2 部會委員より提案に係る臺灣震災地へ視察員派遣に關する件其の他を協議せり。

○昭和 10 年 4 月 22 日までに於て下記諸君を入會並に轉格の手續を了し名簿に登錄せり。

入會會員

伊東祐介君	小方忠美君	大木利彦君
大島省三郎君	加藤 順君	兒玉靜雄君
後藤勝三君	佐々木 祐君	田中茂實君
千葉菊太郎君	成田助六君	船越春雄君
渡邊和夫君	出原 佃君	岩淵英治郎君
倉田一郎君	本多哲治君	牧野錠次郎君

入會准員

阿久根國吉君	秋山義之助君	井上五郎君
伊藤一郎君	石川長雄君	梅原貞三郎君
江川信雄君	大笹 啓君	工藤勇三君
栗原長次君	黑澤健兒君	駒村善雄君
櫻井敬二郎君	志賀津二君	鹽澤 弘君
七田 茂君	島ノ江善治君	鈴木和平君
專頭健二郎君	多田義雄君	高橋才二君
竹田信一君	堤 一雄君	寺井悟一君
富永 武君	豐田太郎君	中村房吉君
長木德藏君	西田彦三君	根本善春君
原 文太郎君	林 毅三郎君	平林兵左右君
藤井與一君	堀 修一君	本郷良作君
前原豐助君	村野林一君	山浦末一君
山口良登君	山谷龜夫君	吉田時二君
吉谷時友君	中館 剛君	橋本脩二君
日野清廣君	森垣 誠君	宮內信智君

入會學生員

新井敬造君	石川正男君	今澤豐正君
遠藤佐武郎君	晉羽正夫君	加藤三重次君
龜山敏郎君	川崎毅三郎君	國井泰雄君
幸野弘道君	合田節二君	佐藤三男君
齋藤義治君	杉山和雄君	瀨尾五一君
高木 薫君	玉井茂男君	津田 理君
野瀨正儀君	橋本秀夫君	三澤三郎君
角田健三郎君	上村五郎君	野元秀雄君

轉格會員

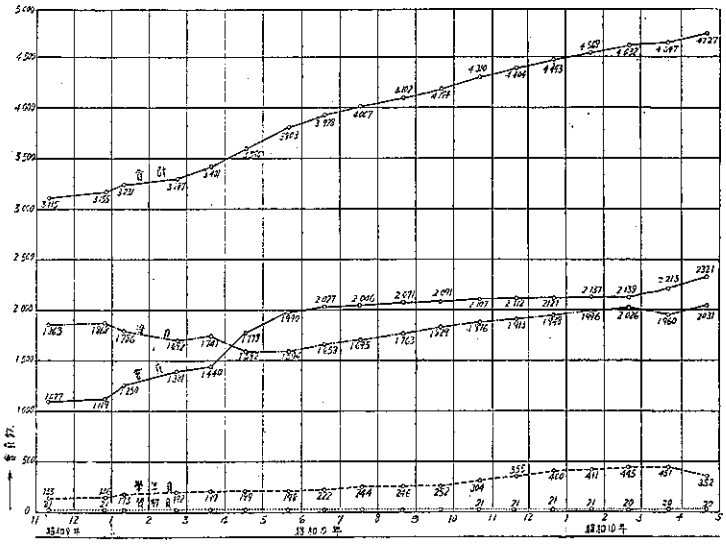
明石太郎君	坏 恒照君	荒川敦二君
有川米男君	伊知地綱彦君	伊藤美代治君
伊藤義昭君	五十嵐作榮君	池田泰治郎君
池本只一君	石光 勝君	磯部照安君
市川壽雄君	稻葉重郎君	入江 寛君
上野美喜世君	小熊正虎君	小田重久君
小田桐一雄君	岡 義重君	加藤誠平君
景元 凉君	片岡 桂君	勝山 肝君
金井邦夫君	金子眞男君	金崎九州男君

金山　保君　　兼田　巖君
上浦　喬君　　熊田隆治君
黑木八五郎君　　黑澤孝作君
桑名次郎君　　桑野重勝君
小杉千代三郎君　　小城末喜君
小林德司君　　後藤繁登君
後藤安之君　　鄉田祐吉君
佐々木　亘君　　齋藤新六君
坂　春吉君　　鳴原長六郎君
七田孫次君　　柴山爲次君
進藤喜久治君　　菅原二三君
鈴木廣太郎君　　關谷清助君
曾我錦五君　　相馬午一君
田中次郎君　　田中義治君
高橋憲雄君　　武內佐次郎君
龍野繁太郎君　　豐村　清君
中川竹三郎君　　中山孝平君
仲谷　光君　　新美誠一郎君　　沼崎　寧君
野田淺六君　　服部玄夫君　　花井　實君
濱崎優二君　　廣瀨宗直君　　福井虎雄君
藤原武雄君　　古川新次君　　古牧兵助君
細井吉治郎君　　堀越知三君　　堀內　保君
眞鍋簡好君　　松下　傳君　　松谷勇治君
松永次郎君　　三浦龍治君　　御厨忠文君
水野赳夫君　　登川圭一君　　宮永靜二君
用澤傳六君　　八木謙治君　　山口利兵衛君
山田耕三君　　山本　茂君　　渡邊清作君
伊藤　剛君　　菊地千代三君

轉格准員

阿武　茂君　　青水宜一君　　淺尾敏夫君
井中久幸君　　伊藤　正君　　石川勝美君
泉本正人君　　岩元　正君　　上野正三君
上原哲雄君　　植草定太郎君　　小川光昌君
小川彌一郎君　　大角正三君　　大平章重君
大村繁三郎君　　岡崎忠一君　　岡村貞男君
奥澤博一君　　鹿熊理三君　　加藤　清君
片山泰雄君　　勝田義文君　　金田萬右衛門君
鎌本雅夫君　　川口　隆君　　川波惠一君
川村滿雄君　　木下淳一君　　北村祐彌君
金　鼎鉉君　　久保道雄君　　久保義光君
藏本忠二君　　小土井善雄君　　小西一郎君
小林　幹君　　古賀　哲君　　駒林　傳君
佐久間正夫君　　佐藤清吉君　　佐藤林左衛門君

會員移動一覽圖表



坂上種正君　　篠原謹爾君　　柴田元良君
庄野　勝君　　須藤正利君　　數枝木　寬君
佳友　彰君　　瀨戸　豐君　　田村　勳君
高橋俊吉君　　高橋辰雄君　　高橋　豐君
瀧田重之君　　竹內千代司君　　橋　好茂君
谷口清治君　　千々和太郎君　　張如　准君
塚田英雄君　　塚本新之助君　　植野正雄君
堤　隆君　　寺西宗登君　　中川太郎君
中務吉之輔君　　中村　清君　　仁田忠臣君
西村清之進君　　野田勝美君　　萩尾勇三君
畑奈基一君　　服部主計君　　早川莊夫君
板東馨富君　　比田　正君　　廣松八千人君
福家千助君　　藤井數雄君　　藤田　久君
藤田博愛君　　藤田正巳君　　本田光夫君
卷內一夫君　　牧野　茂君　　松岡茂喜君
三浦春雄君　　三野茂夫君　　三宅次郎君
御厨春男君　　宮川道彥君　　宮崎喜八郎君
宮澤德司君　　宮本芳英君　　森　全光君
森田紀元君　　矢島順吉君　　安成季隆君
安間雅夫君　　山川　正君　　山田久雄君
山本　匠君　　山本敏雄君　　横井孝一君
横見　正君　　吉田元夫君　　吉戸長六君
吉永眞一郎君　　吉山正夫君　　和田　豐君
若杉正雄君　　若林扶夫君　　渡邊　悟君
渡邊　浩君　　渡邊　實君　　黑井俊治君
高橋咲保君　　吉田　赳君　　井上忠熊君

門屋新一君　中西增藏君

交換又は寄贈を受けたる雜誌（昭和10年4月中）

交換の部

日本鑛業會誌	第51卷第599號	日本鑛業會
造船協會雜纂	第156號 昭和10年3月	造船協會
水道協會雜誌	第23號 昭和10年4月	水道協會
Proceedings Vol. 61, No. 3		American Society of Civil Engineers.
港灣（横濱號）	第13卷第4號	港灣協會
機械學會誌	第38卷第216號	機械學會
業務研究資料	第23卷第11—12號	鐵道大臣官房研究所
鐵と鋼	第21年第3號	日本鐵鋼協會
造船協會會報	第55號 昭和9年12月	造船協會
衛生工業協會誌	第9卷第3號	衛生工業協會
電氣學會雜誌	第55卷第4册 第561號	電氣學會
動力	第35號 昭和10年4月	日本動力協會
日本建築士	第16卷第4號	日本建築士會
資源	第5卷第5號	資源局
日本鑛業會誌	第51卷第600號	日本鑛業會
建築雜誌	第49輯第597號	建築學會
工人	昭和10年4月 第155號	日本技術協會
造船協會雜纂	第157號 昭和10年4月	造船協會
業務研究資料	第23卷第13號	鐵道大臣官房研究所
建築雜誌（大會論文集）	第49輯第598號	建築學會

寄贈の部

工學院同窓會誌	第37卷第4號	工學院同窓會
苛性アルカリ處理設備用としてのニッケル合金の性質		日本ニッケル情報局
コンクリート及鐵筋コンクリート標準仕樣書鐵筋コンクリート構造計算規準 解說書		建築學會
國立公園	第7卷第4號	國立公園協會
沖電氣時報 Vol. 2, No. 2		沖電氣株式會社
東京市中央市場築地本場建築圖集		東京市土木局
東京工業大學學報	第4卷第3號	東京工業大學
土木建築雜誌	第14卷第4號	シビル社
滿洲電氣協會會報	第29號 昭和10年3月	滿洲電氣協會
拉濱線建設工事寫眞帖		南滿鐵道建設局
Memoirs of the Ryojun College of Engineering	Vol. 8, No. 1—3	旅順工科大學
航空機工業に於けるニッケル合金材料		日本ニッケル情報局
工事畫報（東京港號）	第11卷第4號	工事畫報畫社
道路の改良	第17卷第4號	道路改良會
ローマ字世界	第26卷第4號	日本のローマ字社
學術部事業報告	第2號 昭和9年10月	日本學術振興會
地震觀測報告	昭和9年第3册	東京帝國大學地震研究所
東京帝國大學地震研究所彙報	第13號第1册	東京帝國大學地震研究所
建築と社會（法隆寺號）	第18輯第4號	日本建築協會
鑄物	第7卷第4號	日本鑄物協會
彈性體の力學	第1卷	コロナ社
會務彙報	第41號	日本土木建築請負業聯合會
三菱電機	第11卷第1號	三菱電機株式會社
利根	第1卷第4號	利根製作營業所
日立評論	第18卷第4號	日立評論社
セメント界彙報	昭和10年4月 第325號	日本ポルトランドセメント同業會
日本ニッケル時報 Vol. 3, No. 2		日本ニッケル時報局
熊本工業會社	第8號 昭和10年4月	熊本工業會
帝國學士院紀事	第11卷第3號	帝國學士院
九州帝國大學工學部紀要	第10册 第5號第6號	九州帝國大學
鐵道技術	第9卷第5號	鐵道技術社
第二回特許局發明展覽會報告書		特許局
工業現勢	第4卷第4號	東京工業大學工業調査部
機械學會論文集	第1號第2號	機械學會
工學院同窓會誌	第37卷第5號	工學院同窓會

會員　工學博士平林　武君は昭和10年4月26日逝去せらる，

同　鳥取末治郎君は昭和10年4月26日逝去せらる，

准員　松本保雄君は昭和9年11月15日逝去せらる，本會は恭しく哀悼の意を表す。

會　報

第21卷第5號　昭和10年5月

第22回視察旅行記事

風薫る5月，端午の節句の意義深き日を卜し，春のエキスカーションが，參加者54名の多數を得，下記のスケヂュールの下に擧行された。

(1) **集合**　5月5日(日曜日)午前7時20分上野驛(2等待合室)集合。

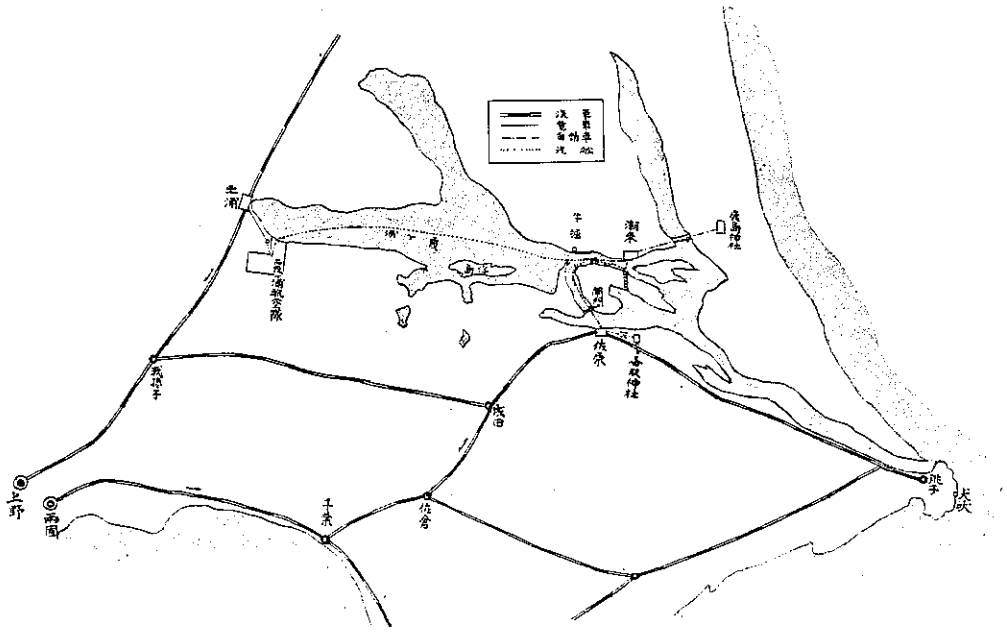
(2) **行程**　午前7時40分上野驛發午前9時16分土浦驛着，電車及自動車にて霞ケ浦航空隊に到り飛行場を見學し，午前10時30分內務省より差し廻しの汽船梅號，柏號に乘船，霞ケ浦飛行場を出發(船中にて晝食)午後1時30分潮來に上陸，自動車にて鹿島神宮を參拜し，午後3時潮來より汽船にて横利根閘門を視察，午後4時30分佐原に上陸，自動車にて香取神宮を參拜し，午後5時23分佐原驛發(車中にて夕食)午後7時37分兩國驛へ到着解散。

(3) **會費**　7圓50錢(汽車2等)但し無賃乘車證利用者は4圓10錢。

以下當日の模樣を略記して見やう。

此の日氣象臺の天氣豫報は聊か悲觀材料にあつたが，幸いにして終日上々の天氣，定刻7時40分上野驛出發，新顔あり，馴染顔あり，連結の二等車二箱は，殆んど會員によつて占有された。時は當に初夏，滿目これ皆新綠の天地，靑葉がくれの沿道を例によつて一大家族の行樂にふさわしい歡談裡に行進が續けられた。坂東太郎利根の流れもまたゝく間に過ぎ，筑波の秀嶺を車窓より仰ぎ見ながら，軈て縣下第二の都市たる土浦着，卽ち9時16分，こゝにて一同下車，驛頭に横山茨城縣土木課長始め土木課員諸氏のお出迎へをうけ，縣差し廻しの自動車20臺に分乘，直ちに霞ケ浦航空隊に向つた。9時40分同隊陸上班着，折惡しく日曜のため飛行練習はなく，親しくその妙技に接することが出來なかつたが，當番隊員より案內をうけ，廣袤88萬坪，さながら綠の毛氈を敷きつめたる如き綠野——滑走場の一隅に立ちて，そここゝと諸設備について說明をうけ，後水上班に向ひ，こゝにてまた信

第22回視察旅行行程圖



號塔，離水場及び格納庫に翼を休めつゝある水上機（偵察機）に就いて說明をうけた。元來本飛行隊は航空練習を主として活動して居るものであり，今日迄，新進日本の航空界に幾多傑出せる人物を送り出した事であらうか，庫內に，他の新式飛行機（高等飛行可能なる）と翼を列べ，今は舊式に屬し，專ら初等練習用として發達の過程を物語る，聊か時代物？の感なきにあらざるこれ等飛行機も，その業績を數へ來れば當に功一級ものたるべきであらうか，機も隊員も亦等しく非常時日本の第一線を守らんとの意氣の下に，日々猛練習が行はれてゐる由を聞き，さもありなん事の思はれて，言ひ知れぬ心强さと，自らなる感謝に頭が下らざるを得なかつた。先を急ぐ行とて，10時40分惜しき別れを告げ，これより內務省東京土木出張所の好意により佐原より廻漕された汽船柏號，梅號に分乘，周囲29里，本邦第二の湖水霞ケ浦縱斷の途についた。

船中には設けの席があり，卓上には茨城縣の好意饗應の茶菓，酒肴，晝食の用意萬端整へられ接待至らざるなく，加ふるに一船に付數名のサービスガール（土浦のゲイシャガールと聞く）まで出動を見，直前の航空隊見學により印象づけられた緊張味は，こゝに一轉して忽ち和氣藹々の一大宴席と化したのであつた。東京土木出張所より橫利根に關するパンフレット並に寫眞茨城縣より縣下各名勝地數十箇所に亙る寫眞等の寄贈をうけ，此の地の認識を新たにし，名にしおふ水鄉巡りの船の旅が進められた。

天愈々碧く，陽光愈々麗かに然も湖面は鏡の如く風いで全く絕好の舟航日和となつた。速力5浬，輕快なエンヂンの響，すべるが如く白波をたてつゝ進む心地好さ，都塵を離れて淸澄な水鄉の大氣，喧噪を避けて靜寂の水鄉に遊ぶ，今や全くせゝこましき都會生活の勞も，憂世の苦も忘れ，何よりの生命の洗濯となつたのであつた。殊に嬉しいのは多數の會員と行を共にし，もてなす側亦親しみ多きメムバーの一員である事は，久し振りの肉親に逢へ，手厚いもてなしをうけし時の樣な親しみと喜びとをしみじみ感ずる次第であつた。目的他潮來まで約3時間もの時間のある事は，一層のどけさを增すのであつた。次々に展開される四圍の風光，明朗を以つて知られし名に背かず，折柄の快晴に惠ぐまれ，實に明るい船の旅が續けられた。宴酣なるに及んで或は船首に座し，或は屋上に出でゝあかず明媚な風景にみとれるのであつた。何時しか歩崎觀音の沖合も過ぎ，やがて紫の筑波嶺を雲烟の彼方に見送り，史跡に名だゝる浮島を右手に眺めながら左航を續け，1時20分に潮來へ到着した。

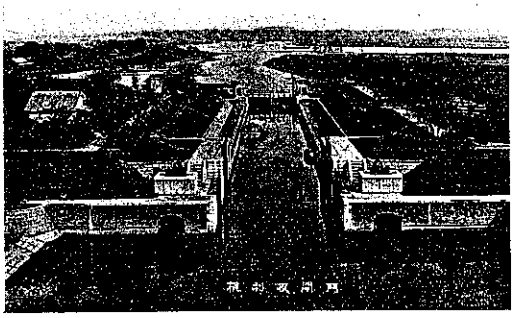
すでにして多數先着の遊覽客があり，汽船發着所前の福稱旅館階上より聞ゆる名物あやめ踊の序曲と覺しき三味太鼓の音をきゝ流しながら，牛堀土木出張所員並に千葉縣側より宮崎土木課長以下課員諸氏に迎へら

水鄉潮來

鹿島神宮

れ，再び自動車に分乘，工事寫眞でおなじみの神宮橋を渡り，一路神宮への參道を急ぐこと半時，老松古杉鬱蒼として茂げれる幽邃境に到つた。官幣大社鹿島神宮の御前である。こゝにて自動車を捨て，神宮に詣で謹んで國家の武運長久を祈つた。御手洗池畔にて少憩

の後，地震鎭めの傳說を持つ要石を尋ねた。此の頃より天候急變して驟雨模樣となり，見る間に大つぶの雨さへ落ち出したのに驚いて再び車上におさまり，2 時 25 分神宮を後に豫定を變へ，雨に烟る水郷の風情を賞でながら一路次の視察場所たる横利根閘門へ急いだ。3 時閘門着，何んたる幸い哉，案ぜられた驟雨は，我等一行の到着と時を同じうして止み，陽の光りさへキラキラと輝き出して，ドライブの道筋に撒水の役目と，晴雨兩樣の水郷氣分をさへ味はしてくれた。この惠ぐまれた天候，何んとはなし學會の前途を視するものゝ樣に思はれた。こゝに一同下車して東洋第一の稱ある閘門を親しく見學した。



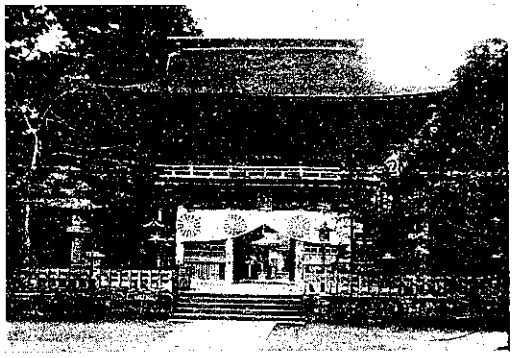
横利根閘門

本閘門は横利根川と利根川との合流點に築造せられ，主として霞ヶ浦，北浦沿岸に逆流する利根川の洪水を防止し，且つ出水時及び平水時に於て船舶の航通を安全自由ならしむるため，7 箇年の歲月と，72 萬圓の巨費を投じ，內務省東京土木出張所に於て直轄施工せられたものである。その詳細に就いては，本學會誌第 12 卷第 3 號所載．前會長中川吉造博士寄稿の論說“横利根閘門に就て„を參照せられんことをおすゝめる。

次に本閘門と地を接し，對岸千葉縣佐原町との間に架設工事中の水郷大橋を視察した。本橋は總工費 45 萬圓（內國庫負擔 15 萬圓，佐原町負擔 5 萬圓，千葉縣負擔 15 萬圓，茨城縣負擔 10 萬圓）を以つて昭和 9 年 2 月に着工，昭和 10 年 10 月竣工の豫定とか，竣工の曉には，繪の水郷に一段の勝景を添へることであらう。これより再び乘船，對岸水郷公園に上陸，佐原町長其他のお出迎へをうけた。

本公園は小野川口の堤防に添ふ眺望詩趣溢るゝの地で，園內には，利根治水記功碑及び中川前內務技監の胸像があつて，永久にその功績を物語つて居つた。こゝにて一同記念撮影を爲し，色々お世話になつた茨城縣の方々にも別れを告げ，一行は 2 班に分れ，第 1 班は香取神宮に詣でて後伊能家を，第 2 班はこの逆コースによることゝし，3 時 50 分水郷を後に自動車を走らせた。4 時神宮前に到着，これより上り勾配となり，兩側には數千の櫻樹が植えられ，今は全く葉櫻となつたが花時の美しさは嘸見物であらうと思はれる參道を歩むこと數分，老杉亭々たる神宮に着いた。

本日は恰も例祭日に當るとかにて，特に參詣人で賑つた。



香取神宮

參詣をすまし，拜殿の後方展望臺に到つて，來し方水郷一帶の地を眺めて再印象をうけ，伊能家へ急いだ。

伊能家を訪問する事は，最初の計畫にはなかつた，が宮崎課長の御斡旋により，一行のため特に先覺の遺品を見せて下さる事になつて，途中コースの變更となつたものだ。4 時 40 分伊能家着，佐原町の中央，小野川畔にある舊家，現存するものは店舗，母屋，土藏の三棟で，その中店舗及び土藏は忠敬以前（約 200 年前の由）の建築で，母屋は寛政 5 年（約 150 年前）忠敬自身の設計によるものとか，その中の由緒ある書齋の廣緣にて，當主三郎右衞門氏の說明を受け，親しく，遺

愛の品，量程車（路上を運行せしめ，その廻轉數によりて距離を算定する機械），半圓方位盤（方位の算定に用ひたるもの）を見せられ，その優れたる着想，その巧妙なる機構に一驚し，克明に記されたる對數表，沿海日誌，國寶物の日本地圖を見てはその努力に再驚し，三驚し，感嘆久しふするものがあり，今更に偉人の足跡をしみじみ偲ばれるのであつた。伊能家に厚く禮をのべ歸路を急いだ。佐原驛前金田ホテルにて少憩，5時23分佐原驛發，出發に際し佐原町商工會より銘々にお土產を頂戴して恐縮した。

車內には，千葉縣の好意による山海の珍味が用意され，宮崎課長を始め，千葉縣土木課員諸氏のサービス100％のもてなしをうけた。千葉驛にて同氏等と別れ7時40分兩國着，こゝに一日の淸遊を了へて散會した。思ふに今次の視察旅行は日歸へりの旅でこそあれ得る所は實に莫大であつた。終日天候に惠ぐまれた事は一層幸いとなつたが，特に上記關係各員の好意によつて，この喜びを滿喫し得た事を思ひ，玆に內務省東京土木出張所，茨城縣及び千葉縣當局，關係者各位並に伊能家，佐原町長，佐原商工會に對し，厚く感謝の意を表し擱筆する次第である。尙當日の參加會員は次の諸氏であつた。

參加會員氏名

青山　士君	新井榮吉君	伊藤孝治君
稻葉權兵衛君	今井　哲君	岩井宇一郎君
上野有芳君	衣斐淸香君	越前谷長吉君
小見喜平君	小野基樹君	大竹邦平君
岡崎正伸君	岡田信治君	岡山銀次郎君
神谷國繁君	川野種藏君	鬼海治三郎君
北澤惇夫君	國富忠寬君	草間　偉君
小阪拓次郎君	後藤宇太郎君	佐藤眞次君
齋藤　飾君	櫻木四月彥君	菅原正志君
曾山親民君	田口俊一君	高橋嘉一郎君
高橋甚也君	中倉專一郎君	中山忠三郎君

永矢三郎君　西畑忠雄君　塙　哲郎君　古川淳三君　松尾末太郎君　松田全弘君
芳賀　博君　長谷川孝之助君　長谷川藤四郎君　森光勇三君　山田隆二君　吉村惠吉君
春木節郎君　西田敏夫君　平井喜久松君　米元晋一君　横山　喬君　宮崎正夫君
平尾　長君　藤田弘直君　古川阪次郎君

訂　正　及　び　追　加　表

第21卷第4號所載

Plane Strain 又は Plane Stress の應力と Symmetrical Strain の應力とが一致する場合の條件に就て

568 頁 (21) 式を　$g_2(z)=p(z)+c_1z+c_2$ ……と訂正

569 頁 (22) 式を　$g_1(r)=4c_3\log r+c_4$ …… 〃

〃　(23) 式を　$\frac{1}{r}\frac{\partial\chi_1}{\partial r}=4c_3\log r+p(z)+2c_1z+(c_2+c_4)$ …… 〃

〃　(24) 式を　$\chi_1=c_1zr^2+c_5r^2+\frac{1}{2}r^2p(z)+2c_3r^2\log r+q(z)$ …… 〃

〃　(25) 式を　$\frac{r^2}{2}\frac{d^4p(z)}{dz^4}+4\frac{d^2p(z)}{dz^2}+\frac{d^4q(z)}{dz^4}=0$ …… 〃

〃　(27) 式を　$\frac{d^4q(z)}{dz^4}=-4\frac{d^2p(z)}{dr^2}$ …… 〃

〃　(29) 式を　$q(z)=-\left(\frac{1}{5}c_7z^5+\frac{1}{3}c_8z^4\right)+c_{11}z^3+c_{12}z^2+c_{13}z+c_{14}$ …… 〃

〃　(30) 式を

$$\chi_1=c_1zr^2+c_5r^2+2c_3r^2\log r+\frac{r^2}{2}(c_7z^3+c_8z^2+c_9z+c_{10})$$
$$-\left(\frac{1}{5}c_7z^5+\frac{1}{3}c_8z^4\right)+c_{11}z^3+c_{12}z^2+c_{13}z+c_{14}\quad\cdots\cdots(30)$$ 〃

〃　(31) 式を　$\chi_1=c_1zr^2+2c_3r^2\log r+\frac{r^2}{2}(c_7z^3+c_8z^2+c_9z)-\left(\frac{1}{5}c_7z^5+\frac{1}{3}c_8z^4\right)+c_{11}z^3$ ……(31) 〃

569 頁下より 8 行目を　$\nabla^2\chi_1=8c_3+8c_3\log r+(4c_1+2c_9+6c_{11})z+r^2(3c_7z+c_8)-2c_7z^3-2c_8z^2$ …… 〃

〃　〃　9 行目を　$\frac{\partial^2\chi_1}{\partial r^2}=2c_1z+6c_3+4c_3\log r+c_7z^3+c_8z^2+c_9z$ …… 〃

〃　〃　10 行目を　$\frac{\partial^2\chi_1}{\partial z^2}=r^2(3c_7z+c_8)-4c_7z^3-4c_8z^2+6c_{11}z$ …… 〃

569 頁 (32) 式を

$$\widehat{rr}=\frac{\partial^2\chi_0}{\partial z^2}=(4\sigma-2)c_1+c_7\{\sigma(3r^2-6z^2)-3z^2\}-c_8(4\sigma z+2z)+c_9(2\sigma-1)+6\sigma c_{11}$$

$$\widehat{zz}=\frac{\partial^2\chi_0}{\partial r^2}=3c_7\{r^2-\sigma(r^2-2z^2)\}+4c_8\sigma z+4c_1(2-\sigma)+2c_9(2-\sigma)+6c_{11}(1-\sigma)\cdots$$

$$\widehat{rz}=-\frac{\partial^2\chi_0}{\partial r\partial z}=(1-\sigma)\left\{8c_3\frac{1}{r}+2r(3c_7z+c_8)\right\}-r(6c_7z+2c_8)\quad\cdots\cdots$$ 〃

570 頁　1 行目　{(32) 式から} をとる。

570 頁　(33) 式を

$$U=-\frac{1+\sigma}{F}\frac{\partial^2\chi_1}{\partial r\partial z}=-\frac{1+\sigma}{E}\{2c_1r+r(3c_7z^2+2c_8z+c_9)\}$$

$$W=\frac{1+\sigma}{E}\left\{(1-2\sigma)\nabla^2\chi_1+\frac{\partial^2\chi_1}{\partial r^2}+\frac{1}{r}\frac{\partial\chi_1}{\partial r}\right\}$$

$$=\frac{1+\sigma}{E}\Big[(1-2\sigma)\{8c_3+8c_3\log r+r^2(3c_7z+c_8)-2c_7z^3-2c_8z^2$$
$$+(4c_1+2c_9)z\}+4c_1z+12c_3+8c_3\log r+2c_7z^3+2c_8z^2+2c_9z\Big]\quad\cdots\cdots$$ 〃

〃　(33) 式と 例 1 の間に次の言葉が入る

"(33) 式は Symmetrical Strain として計算した變位である。Plane Strain 又は Plane Stress として計算すれば勿論 (33) 式とは異る形となる。"

570 頁 **例 1** の 2,3 行目の式を

$$\widehat{rr}=(4\sigma-2)c_1+c_9(2\sigma-1),\ \widehat{zz}=4c_1(2-\sigma)+2c_9(2-\sigma),$$

$$\widehat{rz}=8c_3(1-\sigma)\frac{1}{r},\ U=-\frac{1+\sigma}{E}(2c_1r+c_9r),$$

$$W=\frac{1+\sigma}{E}\left[(1-2\sigma)(8c_3+8c_3\log r+(4c_1+2c_9)z+4c_1z+12c_3+8c_3\log r+2c_9z\right]$$ ……と訂正

例 1 の 4 行目の $\frac{2}{1+2\sigma}\widehat{rr}+\frac{1}{2-\sigma}\widehat{zz}=0$ は $\frac{\widehat{rr}}{2\sigma-1}-\frac{\widehat{zz}}{2(\sigma-2)}=0$ …… 〃

〃　5 行目の "$c_5=0$ ならば" を "$c_8=0$ ならば" …… 〃

例 2 の 2, 3 行目の式を

$$\widehat{rr}=(4\sigma-2)c_1+6\sigma c_{11},\ \widehat{zz}=4c_1(2-\sigma)+6c_{11}(1-\sigma),\ \widehat{rz}=8(1-\sigma)c_3\frac{1}{r}$$ …… 〃

$$U=-\frac{1+\sigma}{E}2c_1r,\ W=\frac{1+\sigma}{E}\left[(1-2\sigma)(8c_3+8c_3\log r+4c_1z)+4c_1z+12c_3+8c_3\log r\right]$$ …… 〃

例 2　4 行目の

"例 1 と似てゐるが變位の方は大分性質が違ふ" を "例 1 と似てゐる" …… 〃

會　　告

講演並に映畫會通知

下記の通り講演並に映畫の會を催しますから御誘ひ合せ多數の御來會を希望致します。

1. 日　　時　昭和 10 年 6 月 14 日 (金曜日) 午後 5 時より
2. 會　　場　帝國鐵道協會 (麹町區丸ノ内 3 ノ 4)
3. 講演並に映畫

(イ) 講　　演

昭和 9 年關西風水害に就て

中央氣象臺技師
東京帝國大學教授　理學博士　藤原咲平君

(ロ) 映　　畫

第 2 吉野川橋梁ケーブル・エレクション

鐵道省岡山建設事務所編纂

○映畫終了後有志晩餐會を催します，御繰合せ多數の御出席を希望致します，會費 2 圓 (當日御持參のこと)。

○御出席の有無 (講演映畫會並に晩餐會) 來る 6 月 10 日までに御申出で下さい。

會　　告

特許局長官より發明展覽會開催に就き下記の通り照會がありましたからお知らせ致します。

詳細は特許局又は當學會へお問合せ下さい，申込期日は 6 月 1 日より同 30 日迄であります。

記

10 特發展第 18 號

昭和 10 年 4 月 25 日

特許局長官　中　松　眞　卿

社團法人　土木學會々長殿

發明考案ノ普及發達ヲ圖ル爲當局ニ於テハ年々發明展覽會ヲ開催スルコトト相成居候處今般其ノ第 3 回展覽會ヲ來ル 11 月 1 日ヨリ 14 日ニ至ル 2 週間ニ亘リ東京市麹町區丸ノ内 3 丁目府立東京商工奬勵館内ニ於テ開催致候ニ就テハ本會ノ目的達成ヲ翼賛セラレ度別紙印刷物ニ付委細御了知ノ上出品斡旋方可然御高配相煩度此段得貴意候也

（別紙省略）

會　　告

日本工學會工業教育調査委員會の本會代表委員藤井眞透君より今回下記の通り報告がありましたから御知らせ致します。

記

工業教育調査委員會經過報告

日本工學會工業教育調査委員會は工業教育の刷新を圖らんが爲土木學會，日本鑛業會，日本鐵鋼協會，火兵學會，造船協會，建築學會，工業化學會，衞生工業協會，電氣學會，電信電話學會，機械學會，照明學會並に工學會代表の聯合委員を以て組織せられ會合する事 20回，愼重審議の結果昭和 9 年 10 月 2 日別紙の如き教育制度改正案を作成せり。

右報告す。

委員　藤　井　眞　透

工業教育制度改革案（昭和9年10月）

時勢の進運に鑑み我が國工業教育制度の改善に就き考究するの要あるを認め，本學會は本學會竝に關係12學會推薦の委員を以て工業教育調査委員會を組織し愼重調査を遂げ，玆に工業教育制度改革案を議定せり。依て以て我が國工業教育制度改善の指針となすべく工業立國の基を確立するの資となすべきを信ず。

昭和9年10月2日

日本工學會理事長　男爵　斯波忠三郎

委員竝に推薦學會左の如し

日本鑛業會： 佐野秀之助（幹事）（昭和9年6月辭任）　青山秀三郎（昭和9年6月就任）
日本鐵鋼協會： 俵　國一
土木學會： 山口　昇（昭和9年6月辭任）　藤井眞透（昭和9年6月就任）
火兵學會： 青木　保
造船協會： 平賀　讓（昭和9年5月辭任）　山本武藏（昭和9年5月就任）
建築學會： 大熊喜邦（昭和8年4月辭任）　內藤多仲（昭和8年4月就任）
工業化學會： 松井元太郎
衞生工業協會： 竹村勘悉
電氣學會： 中村幸之助
電信電話學會： 西脇吉久
機械學會： 沖　巖（幹事）
照明學會： 山本忠興
日本工學會： 秋保安治　宇野三郎　氏家長明（昭和9年4月辭任）
植村東彥　大河戸宗治　加藤靜夫（昭和9年3月死亡）
佐野利器（委員長）　佐野秀之助（昭和9年6月就任）
關　盛治（昭和8年11月死亡）　根岸政一
平賀　讓（昭和9年6月就任）　松田竹太郎（昭和9年6月就任）
三輪震一（昭和9年6月辭任）　森井健介（幹事）
山口　昇（昭和9年6月就任）　山下興家
吉成宗雄（昭和9年4月就任）

工業教育調査委員會報告

工業教育制度調査の爲昭和8年2月設置せられたる本委員會は同年3月第1回委員會を開催爾來

委員會を開催すること19回，其の間小委員の會合すること7回に及び審議の結果昭和9年10月2日開催の第19回委員會に於て別紙の通り工業教育制度改革案を決定致候條此段及報告候也

昭和 9 年 10 月 2 日

工業教育調査委員會委員長　佐　野　利　器

日本工學會理事長　男爵　斯 波 忠 三 郎 殿

工業教育制度改革案

1. 緒　　言

國運の隆昌は一に產業の振興に俟たざるべからざるは贅言を要せざる所にして，就中我が國の如く天然資源の貧弱なるに反し，人口及消費の激增する國情にありては工業の發達如何は產業隆替の鍵を握れるものなりと云ふも敢て過言にあらざるべし。

然るに今や我が國の工業は歐米諸國の模倣を脫し獨自の境地を開拓し，工業日本の發展を策すべき重大なる轉機に際會せり。從つてこれが教育も明治時代より傳承し來れる舊殼を脫剝し，深く既往の實績を照顧し將來の推移を洞察し刷新改善の案を樹立せざるべからず。此の秋に當り我が日本工學會は其の使命に鑑み，昭和 8 年 3 月工業教育調査委員會を組織し工業教育全般に亙り愼重審議すること 20 有幾回，漸く次に述ぶるが如き成案を得たるを以て之を文部當局初め廣く江湖の諸賢に提示して批判を求めむとす。

顧れば大正 9 年 3 月我が日本工學會が聯合工業調査委員會第 2 特別委員會の報告を得て，これを文部省に建議する所ありしが，大正 9 年及大正 10 年に於ける實業學校令並に工業學校規程の大改正に當り，其の一部の實現を見たるは洵に本會の欣快とする所にして，今般の改革案に對しても，目下文部省に於て鋭意調査立案せられつゝある教育制度の骨子とし，これが實施を見れば啻に本會の幸たるに留らざるなり。

2. 教育制度立案の精神

職工たるべきものゝ資質を教養する點より現行國民義務教育を見れば未だ十分なりとは認め難く，又既に職工たるべきものゝ向上に資すべき補習教育にありても其の不備なることを感ぜざるを得ず。而して中等技術者養成の機關たる現行中等工業學校は其の程度一般に低く，又工業專門學校は中等技術者養成機關としても高等技術者の養成機關としても適當ならず。次に高等技術者の養成機關としての大學に達するには普通學の階段徒に多く，其の結果修業年限の延長を招來す。

斯くの如く現行工業教育機關全體を通じて根本的に改變するの要を認めざるを得ず。加之，工業教育機關は云ふまでもなく現在及將來に於ける各種教育機關の一部にして，他の教育機關を考慮せずして論ずることは極めて困難なるを以て教育制度全般に亙る體系を考究したり。即ち教育制度を 3 階段とし各其の使命とする完成教育に努むるを要旨としたり。勿論本案は工業教育を主眼として立案せるものなりと雖も，亦以て一般教育の改善に一致すべきものなるを信ず。

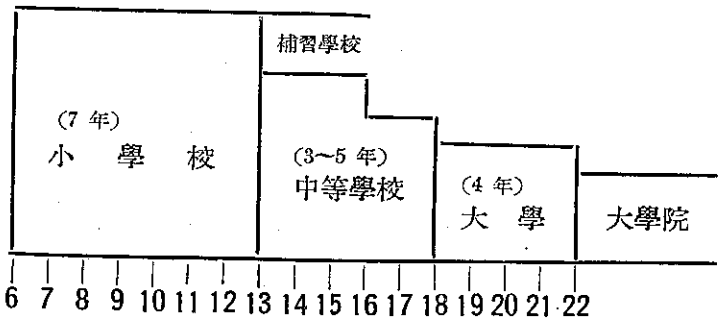
3. 教育制度の要綱

前述の要旨に依り得たる教育制度の大綱次の如し。

1. 學校の主體を小學校，中等學校，大學の 3 階段とす
2. 小學校（義務教育）は修業年限を 7 年とす
3. 中等學校は修業年限を 3 年乃至 5 年とす

4. 大學は修業年限を 4 年とす

5. 大學院は修業年限を定めず



右案の實施に伴ひ特に重要なりと認めらるべき事項を摘記すれば卽ち次の如し。

1. 精神的教育を重視し堅實なる思想と高尙なる人格との養成に努むること
2. 教授訓練に當りては徒に形式に流れず基礎的觀念及實際的智能の練磨に努むべきこと
3. 學校卒業に伴ふ資格特權は之を全廢し凡て國家試驗により之を附與すること
4. 教育は地方の情況に適應せしめ特に初等及中等教育に於て鄕土の開發に留意すべきこと
5. 現在の各種學校の如き全く自由なる組織の學校は其の使命に鑑み一層助長せしむること
6. 國家は私立學校に對し一層の援助を與へ保護助成すると共に之を嚴に監督し其の健全なる發達を期すること

4. 教育制度の要旨

(1) 初等教育及補習教育

1. 小學校（義務教育）の修業年限は滿6歲より7年とすること
2. 小學校に於ては國民教育の完成に努むるは勿論進んで勞務に服するの訓練を徹底せしむること
3. 補習學校は小學校の教科を卒へ職業に從事する者に對し國民生活に須要なる教育をなすと共に實務に關する知識技能を練磨せしめ修業年限は別に定めざること

工業振興の基礎要件の一は一般職工教育の向上にあり，これ蓋て國民教育の向上に俟たざるべからず。而して國民教育の完成には，修業年限 6 年にては十分ならざるを以て，其の年限を延長し時代の進運に適應せしめんとすることは教育界積年の希望なり。故に現時の財政其の他の情況を參酌すれば，寧ろ現在の高等小學校を廢止して其の一部を補習教育に委ね，小學校義務教育年限を 1 年延長して 7 年に改め，一般國民教育の充實を圖るを以て遙に優れりとなすべし。而して旣に職工たるものゝ教育又は職長の養成の爲には地方公共團體又は工場自體等に於て補習教育機關を設置し，晝間又は夜間の授業を行ひ，形式的教育を避け實際的知識技能の練磨を重視すると共に人格の陶冶に力を注ぎ醇風美俗の養成に努むべきものとす。

(2) 中 等 教 育

1. 中等學校は小學校卒業を入學資格とし其の修業年限を 3 年乃至 5 年とすること
2. 中等學校は中學校及實業學校に分ち中學校にありては高等普通教育をなすこと
3. 實業學校は更に工業學校，農業學校，商業學校に分ち職業に從事するに須要なる教育をなすこと
4. 中等學校は晝間授業を原則とすれども夜間授業をも認むること

中等教育機關は小學校卒業者を收容して普通又は專門に關する教育を施す點に於て略々現行制度と類似せりと雖も，工業學校にては其の內容を改善充實して，工業從事者の中堅たるべき中等技術者養成の上に全きを期せざ

るべからず，即ち眞面目にして努力的精神を有する技術者たることを目標とし，徒に形式的若くは理論過重の弊に陷らず專ら事の實際に即しつゝ基本的技能の修得に努めしめ，勞務に服するの慣習を養ふべく，又常識及趣味の涵養により品性の向上人格の陶冶に意を須ひざるべからす。而して工業學校に於ては基礎學科目たる數學，物理，化學等を重視し，其の基本的法則に付十分の理解を與ふることに努むべきものとす。又工業學校に於ては夜間授業を特に必要とす。蓋し晝間實務に從事するものゝ向上に資するのみならず，却つて實際に即したる優良なる技術者を養成し得べければなり。

現行の工業專門學校は中等技術者養成の爲には修業年限長きに過ぎ，高等技術者養成の爲には幾分低きに失し卒業後の活動十分とは認め難く所謂帶に短く襷に長き憾なきにあらず。仍て中等技術者の養成は之を新制工業學校に俟ち得べきが故に現行工業專門學校は或ものはこれを整理し，或ものはこれを大學として高等技術者養成機關たらしむべし。

(3) 高 等 教 育

1. 大學は修業年限 5 年の中等學校卒業竝にこれと同等以上の學力あるものを入學資格とし其の修業年限を 4 年とすること
2. 大學は單科大學及綜合大學に分ち何れも其の專門に關し一層精深なる學術を授くること
3. 大學は晝夜間の授業を行ひ又選科及聽講等の制度を設け實務に從事する者の研學に便すべきこと
4. 綜合大學には學術の蘊奥を究むる者の爲に大學院を設置し主して大學卒業者を考試の上入學せしむること

現行の高等學校並に大學豫科を廢することは教育制度上の特殊なる段階を除き完成教育の意義を徹底せしむる上に於て最も適切なりとす。大學の入學に際しては一定の考査を行ふこと勿論なれども中等學校卒業者は其の中學校たると實業學校たるとを問はず極めて平等に取扱ひ，中等技術者たる資格あるものに不利なるが如き矛盾を排せざるべからず。而して大學は社會上嚮て指導的の地位に立つべきものの養成に當るが故に單に專門の學術に偏するの弊を避け，人格の陶冶に最も意を致すべきものとす。

寄稿に關する注意

1. 用　紙：成るべく本會の原稿用紙を使用され度し。原稿用紙は御請求次第御送り致します。

2. 頁　數：頁數は本會の原稿用紙 180 枚（本會誌 30 頁）以内とされ度し。若し前記頁數を超過する場合は登載をお斷りすることがあります。

3. 書　體：横書とし，假名は平假名，數字は算用數字，ローマ字は日本式ローマ字を使用され度し。歐字は特に明瞭に認められ度し。例へば n と u, u と v, r と v, a と α, r と γ, その他頭字と小字とを判然たらしむる事。

4. 算式標準：(1) 本文文字間に挿入する算式は

例へば a/b と書き $\frac{a}{b}$ を避け，$(a+b)/(c+d)$ と書き $\frac{a+b}{c+d}$ を避けること。

(2) 數　　字

數字は 3 桁互に間隔をあける事。名數は次の如く書き括弧内の如く書くを避けること。例へば

35 錢（三十五錢），13.56 圓（十三圓五十六錢），1～4 時間（一時間乃至四時間），88 326 t（八萬八千三百二十六瓩），1935 年 1 月 1 日（千九百三十五年一月一日），m（米），m³（立方米），kg（瓩），l（立），83.4 尺（八丈三尺四寸），7 吋（七吋）

5. 用　語：應用力學及コンクリート用語は工學會決定用語を使用され度し。（應用力學用語は本誌第 19 卷第 5 號，コンクリート用語は第 20 卷第 6 號會告參照）

コンクリートは片假名で記し漢字を用ひざること。

6. 圖　表：(1) 圖表には圖表題を記すこと。

(2) 複雜なる表の如きは成るべくグラフにて示す事。

(3) 圖面はその儘縮寫し得る樣にトレーシング・ペーパー，オイル・ペーパー，トレーシング・クロース等とすること。

(4) 圖表は凡て墨色を用ひインキ類或は採色を施さゞる事。

(5) 方眼紙は青罫のものを用ひ（黄色，赤色の罫は使用せざる事）縱横線を必要とする部分には豫め墨線にて之を描き置くこと。

(6) 圖表の文字，數字は特に大きく書かれ度し。（縮寫の標準は 1/2～1/5 程度を以て縮寫後の文字の大きさを約 2 mm 程度となる樣され度し。）

(7) 圖表類は製版の都合上かなり汚損するものと豫め御含み下され度し。

7. 寫　眞：寫眞は特に明瞭なるものを送られ度し。

8. 其　他：論說報告には必ず冒頭に英文表題及び邦文內容梗概並に著者の職名及び勤務所名を添附され度し。

附　記：(1) 論說報告，彙報，參考資料及び工事寫眞にして掲載せる分には薄謝を呈します。

(2) 講演，論說報告の各欄に掲載の分には拔刷 20 部を寄稿者に贈呈致します。尙 20 部以上御希望の向には豫め御通知ある場合に限り實費にて御要求に應じます。

新入會者にして既刊會誌希望者に告ぐ

本會々誌は新入會者には入會の月より以降發行に係るものより配布致すべきに付その以前の會誌御希望の場合は1部に付下記金額振替口座東京 16828 番に拂込用紙通信欄にその旨記入請求せられたし

殘部内譯

號 / 卷	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	金額(1部)(円)
5	*	*	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.00
6	—	—	—	—	—	*	—	—	—	—	—	—	1.00
7	—	*	*	*	—	—	—	—	—	—	—	—	1.50
8	*	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.00
9	*	*	*	—	*	*	—	—	—	—	—	—	2.00
10	—	*	*	*	*	*	—	—	—	—	—	—	2.00
11	—	*	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.00
12	—	*	*	—	*	*	—	—	—	—	—	—	2.00
13	—	*	*	—	—	*	—	—	—	—	—	—	2.00
14	*	*	*	*	*	*	—	—	—	—	—	—	2.00
15	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1.00
16	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1.00
17	*	*	*	*	*	*	*	*	—	—	*	*	1.00
18	—	—	*	*	*	*	*	*	*	*	*	—	1.00
19	*	*	*	—	*	*	*	*	*	*	*	*	1.00
20	*	*	*	*	—	*	*	*	—	—	*		1.00
21	—	*	*	*									1.00

第 20 卷第 12 號（創立 20 周年記念號）…… 1.50
東京市内外交通に關する調査書…… 3.00
震害調査報告書(1,2,3)…… 18.00
應用力學聯合大會講演集…… 1.00
鐵筋コンクリート標準示方書…… 0.50
同　上　〃　解　説…… 1.00
土木工學論文抄錄…… 3.50

（備考：＊は殘部有るもの）

本會會員轉居又は旅行の場合の注意

會員の住所の不明なるときは會誌の配布を始めその他通信上に差支候に付御轉居の際は至急明細に御通知相成度又御旅行等にて御不在となるも會費支拂には差支なき樣御配慮相成たし

會費納付に付注意

本會々費は下記の通りにして本會より發する振替集金に對し是非御支拂願度事若しこの集金書へ 15 日間中 3 回の取立金支拂なき場合は最寄郵便局に就き本會振替口座東京 16828 番に（拂込用紙通信欄に會費たる事を記入の事）御拂込相成度尚會費一時納付の御豫定又はその他の都合により支拂なき場合は直に御通知相煩度

朝鮮滿洲の一部及び青島等振替貯金を取扱はざる地に居住せらるゝ會員は納期の翌月末頃迄集金を受けるときは爲替その他の方法に依り直ちに御送金相成たし

會員種格	會費年額	自1月 至6月 第1期分3月徵收	自7月 至12月 第2期分9月徵收
會員	金 12 圓	金 6 圓	金 6 圓
准員	金 9 圓	金4圓 50 錢	金4圓 50 錢
學生員	金 6 圓	金 3 圓	金 3 圓

新に入會したるものは月割算として入會の翌月集金を發す

會費未納に付注意

會費は年額を第1期第2期に分割し毎年 3 月 9 月に振替貯金郵便として取立方を郵便局に依託の處往々集金郵便に對して故なく支拂を拒絶し尚他の方法に依りても送金なき者あれ共斯くては會費滯納者として遺憾ながら定款第2章第 14 條第1項に依り遂に會誌の配布を停止せらるゝに至るべく又本會に於ても未納金督促の手數一通ならず故に今後右樣のことなき樣特に御留意の上集金郵便に御拂込相成たし

會誌未着の場合の注意

會誌は毎月 25 日（印刷又は原稿等の都合に依り遲延する事あり）に發行し漏なく配布すべきに付未着の場合には一應本會に御照會相成たし從來往々發行後數ケ月經過して照會せらるゝ向あるも斯くて殘部

會　告

雜誌閲覽に就て

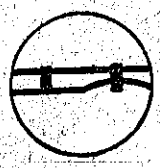
本會所有の圖書及び雜誌は本會事務所に備付けてありますから下記時間内御隨意に御閲覽下さい。尚本會所有の圖書を整備充實致したいと思ひますから會員の著書は學會宛御寄贈下さる樣願ひます。

閲　覽　時　間

自午前9時至午後8時，但土曜日自午前9時至午後4時，日曜日及祭日休。

本會徽章に就て

昨年5月下圖の如き意匠の銀地金文字浮き出しの優美なる徽章を制定し，一般會員の方々に必ず佩用して頂くことに致しました。未だ佩用せられない方は至急御申出で下さい。實費50錢で頒布致します。



廣　告　料

普通廣告	1回1頁	35圓	1回半頁　20圓
指定廣告	裏表紙3面對向及廣告初頁	1回1頁	40圓
	裏表紙3面	1回1頁	70圓
	色アート	1回1頁	60圓

○指定廣告は凡て1箇年繼續申込のものに限り取扱ふものとす

○會員自身の廣告に對して總て上記料金の割引とす

○同一廣告の連續掲載申込に對しては1年4回以上1割引とす

○廣告に寫眞版又は木版等を挿入する場合は之に要する實費を別に申受くるものとす

DOBOKU-GAKKAI-SI.

(JOURNAL OF THE CIVIL ENGINEERING SOCIETY.)

VOL. XXI, NO. 5, MAY, 1935.

CONTENTS.

Page

Proceedings of the Society. 39

Addresses.

Reconstruction Plan of Osaka-Harbour in view of the Damage by Typhoon and High Tide.
By Sinnosuke Utiyama, C.E., Member. 611

My View of the 7th International Road Congress and on the Public Works in the World.
By Syûzo Miwa, C E , Member. 617

Papers.

On the Strength of Cast Iron Pipes (Part II)
By Tokusaburo Ikeda, C.E., Member. 625

On the Stability of Long Columns with Variable sections at both Ends.
By Daizô Hiura, C.E., Member. 655

On the Pontoon Erection of Steel Truss, utilizing the Tidal Range, of the Nagahama Highway Bridge.
By Ryôiti Takeda, C.E., Member. 665

One Method on the Calculations of Stresses in Gravity Dam.
By Yosisuke Arai, C.E., Assoc. Member. 677

Discussions. 695

Notes on Matters of Interest. 701

Patent News. 727

Abstracts of Selected Articles. 729

OFFICE

No. 6, 3-TYÔME, MARUNOUTI, KÔZIMATI-KU, TÔKYÔ, JAPAN.